

読書習慣の形成とキャリア発達を促す学習プログラムの検討
—朝読書と学級活動を活用して—

森下由佳・日暮利明・吉田浩之

群馬大学教育実践研究 別刷
第41号 287～298頁 2024

群馬大学共同教育学部 附属教育実践センター

読書習慣の形成とキャリア発達を促す学習プログラムの検討 —朝読書と学級活動を活用して—

森下由佳¹⁾・日暮利明²⁾・吉田浩之³⁾

1) 沼田市立沼田小学校

2) 群馬県教育委員会事務局中部教育事務所

3) 群馬大学共同教育学部附属教育実践センター

Study of learning programs to promote reading habits and career development —Take advantage of morning reading and class activities—

Yuka MORISHITA¹⁾, Toshiaki HIGURE²⁾, Hiroyuki YOSHIDA³⁾

1) Numata Elementary School, Numata, Gunma

2) Gunma Prefectural Board of Education Chubu Educational Administration office

3) Cooperative Faculty of Education, Gunma University

キーワード：朝読書，学習カード，学級活動，キャリア発達

Keywords: morning reading, learning print, class activities, career development

(2023年10月23日受理)

1 問題と目的

「子どもの読書活動の推進に関する法律」（以下、「推進法」）は、子どもの読書活動の推進に関する施策を総合的かつ計画的に推進し、もって子どもの健やかな成長に資することを目的とし、2001年12月に施行された。推進法第8条第1項には「政府は、子どもの読書活動の推進に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため、子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画を策定しなければならない」と定められている。これに基づいて、2002年12月に「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」（以下、「基本計画」）が策定された（文部科学省、2002）。

その基本計画では、我が国では子どもの読書に親しむ態度を育成し読書習慣の形成を図ることが課題とされる中で、「学校における子どもの読書活動の推進」の項目を示し、学校においては、読み聞かせや朝の読

書、各学校が目標を設定する取組等を通じて、子どもの読書に親しむ態度を育成し、読書習慣の形成が図られるよう努めることとしている。その後、2008年3月に第二次基本計画、2013年5月に第三次基本計画が策定され、2018年4月20日には第四次基本計画が閣議決定された。

そのように基本計画を進める中で、大きな課題は不読率（1か月に一冊も本を読まない子どもの割合）とされている。第三次基本計画（2013）では、2022年度に小学生2%以下、中学生8%以下、高校生26%以下とすることを目標としていた。しかし、2017年度の不読率は小学生5.6%、中学生15.0%、高校生50.4%であり、いずれの世代においても第三次基本計画で定めた進捗での改善は実現しておらず、第四次基本計画（2018）では、第三次基本計画と同じ数値目標が引き継がれるとともに、学校においては読み聞かせや朝の読書、各学校が設定する取組等を通じて、読書習慣の

形成が図られるよう努めることとした。さらには発達段階に応じながら、つながりのある読書活動の取組を計画的に進めていく必要性を示し、その中で高学年児童の傾向を踏まえつつ中学生の傾向を視野に入れたつながりのある読書活動のポイントが例示された。具体的には高学年では本の選択ができ始めることや、好みの本の傾向が現れ読書の幅が広がり始めること、また中学生では共感したり感動したりできる本を選んで読むようになることや、自己の将来を考え始め読書を将来に役立てるようになることを挙げている。

高校生の不読率が高いことを受けて行った文部科学省委託調査「子供の読書活動の推進等に関する調査研究」(2017)によると、読書を行っていない高校生は、中学生までに読書習慣が形成されていない者と、高校生になって読書の関心度合いが低くなり本から遠ざかっている者に大別されるとしている。前者については、子どもが発達段階に応じて読書習慣を身に付けることができるよう、乳幼児期からの読書活動が重要であることを踏まえつつ、発達段階ごとの特徴を考慮した効果的な取組を実施することが重要と指摘している。

読書量や読書習慣への影響に関する調査・研究をみると、「子どもの頃の読書活動の効果に関する調査研究」(国立青少年教育振興機構, 2021)では、興味・関心にあわせた読書経験が多い人ほど、小中高を通じた読書量が多い傾向にあるとし、その中で、「一日に読むページを決めて読むこと」や「学校や市の推薦図書を選ぶこと」等を多く経験することは、小中高を通じた読書量の少なさと関連することも指摘している。また、「子どもの読書活動に関するアンケート調査結果」(鳥取県教育委員会, 2017)では、高校生・大学生を対象に、これまでを振り返り「現在の読書習慣に

影響を与えたのは何ですか」との質問に対しての最多は、「学校での一斉読書(朝読書)」とし、次は「家の人の働きかけ」としている。

表1は、第一著者の置籍校(以下、「本校」)の2018年度以降の全国学力・学習状況調査における読書時間に関する児童質問紙調査(以下、「読書の児童質問紙調査」)の結果および同質問の本研究の対象学級(以下、「本学級」)の3月の結果である。本校では長年、年間を通じて週に1回、全児童が「朝の読書」を行い、子どもが読書に親しむ機会を計画してきたが、各年をみると読書を「全くしない」の割合は9.5%から25.0%で、不読率2%以下には至っていなかった。同質問を2022年3月に本学級で行った結果、「全くしない」の割合は13.3%であった。また、表2は著者自作の読書の興味・有用感に関する質問(「読書が自分の好きなことや興味や目標等に役に立った、よかった等と感じたことがあるか」)の結果である。本学級では、否定的回答(「あまりない」、「全くない」)の割合が6割を占め、読書への興味や有用感を促すことには課題がみられた。

そのような読書時間や興味・有用感に関する課題に対しては、第四次基本計画で指摘するように、乳幼児、児童、生徒の各発達段階に応じながら、つながりのある読書活動の取組を計画的に進め、小学校高学年の段階で言えば、児童の発達段階に応じながら、中学校へのつながりを見通しつつ、読書習慣の形成を促す取組の充実を図る必要がある。具体的には、上記基本計画で指摘する中学校段階とのつながりを見通し自己の将来に役立てようとする読書の視点、上記基本計画および読書量への影響の調査・研究で指摘する個々の興味・関心にあった読書の視点、読書習慣への影響の調査・研究で指摘する学校での一斉読書(朝読書)と

表1 「学校の授業時間以外に、普段(月～金曜日)、一日あたりどれぐらいの時間、読書をしますか」の結果

時期	項目	2時間以上	1時間以上、2時間より少ない	30分以上、1時間より少ない	10分以上、30分より少ない	10分より少ない	全くしない
2018年度	本校児童(対象21名)	5.0%	10.0%	20.0%	20.0%	20.0%	25.0%
	群馬県(公立)	7.9%	13.0%	23.6%	24.7%	13.7%	17.0%
	全国(公立)	7.8%	11.5%	21.8%	25.1%	14.9%	18.7%
2019年度	本校児童(対象21名)	4.8%	14.3%	28.6%	38.1%	4.8%	9.5%
	群馬県(公立)	7.5%	12.8%	23.1%	24.9%	14.8%	16.9%
	全国(公立)	7.0%	11.3%	21.5%	25.9%	15.6%	18.7%
2021年度	本校児童(対象21名)	13.3%	0%	26.7%	40.0%	6.7%	13.3%
	群馬県(公立)	8.1%	11.8%	20.5%	23.0%	13.9%	22.7%
	全国(公立)	7.4%	10.8%	19.2%	23.8%	14.7%	24.0%
2022年3月	本学級5年生(対象15名)	0%	6.7%	33.3%	40.0%	6.7%	13.3%

表2 読書の興味・有用感に関する調査結果

時期	項目	とてもある	少しある	あまりない	全くない
2022年3月	本学級5年生 (対象15名)	26.7%	13.3%	60.0%	0%

家の人の読書への働きかけの視点を活用することは、読書習慣の形成を促すことに効果が期待できると考えられる。

なお、上述の視点は現行学習指導要領（文部科学省，2018）で新設された小学校から高等学校までを見通したキャリア教育の推進の視点にも重なるところがある。その総則には「キャリア教育の充実」が初めて明示され、小学校から高等学校において、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付け、児童生徒のキャリア発達を促していくことができるよう、学校の教育活動全体を通じてキャリア教育の充実を図ることを示し、学級活動が「キャリア教育を効果的に展開していく要」と位置付けられた。また、その中では、「キャリア・パスポート」（文部科学省，2019）の活用が求められ、項目として「なりたい自分を描く項目」、「学習や生活に関する項目」、「興味・関心に関する項目」、「家の人、保護者とのやりとりの項目」が設定されている。それらの項目は、上述の読書習慣の形成を促す視点と重なるものである。したがって、それらの視点を活用した読書習慣の形成を図る取組は、児童のキャリア発達を促す効果も期待できる可能性が考えられる。

そこで本研究では、上記の視点を盛り込んだ読書

カードを活用した「朝読書」とその取組の充実を図る目的で実施する「学級活動」を中核にした学習プログラムが、児童の読書習慣の形成を促すことへの効果を検討することを目的とした。また、その取組を通じたキャリア発達を促す効果についても検討した。

2 方法

2.1 調査対象

本研究の対象は、第一著者が担任する6年生児童15名（男子6名，女子9名）であった。また、調査期間は2022年3月下旬から2022年12月中旬であった。なお、研究計画、協力内容、データの収集・分析・公表およびプライバシー保護については、事前に学校に説明し同意承諾を得た。その後、同様の内容について対象者および対象者の保護者に説明し、同意承諾を得て実施した。

2.2 調査方法と調査内容

本研究の調査・実践（以下、「本実践」）のプログラム内容は表3に示すとおりである。本実践の効果の検討は、アンケート調査、読書カード記述、学級活動のワークシート記述、インタビュー調査で行った。なお、アンケート調査および読書カード上の回答の統計処理については、IBM SPSS（Statistics27）を用いて行った。自由記述については、それらをKJ法によるグループ編成方法に従ってカテゴリー化した。調査・分析は第一著者と教育実践学を専門とする第二著者と教育心理学を専門とする第三著者の計3名で行った。

表3 本実践のプログラム内容

項目	実施時期・回数	方法・内容
・アンケート調査	3月，7月，11月	・本学級児童を対象にアンケートの実施。児童の実態把握、取組効果の検討。
・朝読書	4月から11月(全20回)	・読書カードを活用した朝読書。カード記述状況の検討。
・学級活動①	4月	・「なりたい自分」「1学期の目標」。学習シート記述状況の検討。
・学級活動②	4月	・読書への関心や意欲の向上。読書カードを活用する読書活動の説明。
・学級活動③	4月	・読書活動の「なりたい自分」に役立つ理解の深化。読書カード活用の再確認。
・学級活動④	5月	・読書カードを活用した取組の振り返り。学習シート記述状況の検討。
・学級活動⑤	6月	・1年生への読み聞かせ活動と本選びのアドバイスのリハーサル学習。
・学級活動⑥	7月	・「なりたい自分」「1学期目標の振り返り」。学習シート記述状況の検討。
・学級活動⑦	9月	・読書活動の充実に向けた個々の課題や要望の明確化。学習シート記述状況の検討。
・学級活動⑧	9月	・朝読書の取組の相互紹介と意見交換。学習シート記述状況の検討。
・学級活動⑨	10月	・読書活動の充実に向けた個々の取組の明確化。学習シート記述状況の検討。
・保護者との連携①	4月	・保護者を対象に配布文書を通して、本研究の説明と協力依頼。
・保護者との連携②	5月	・保護者懇談会で本学級保護者に直接に本研究の説明と協力依頼。
・保護者との連携③	7月	・保護者対象の三者面談時に読書活動の協力依頼と取組の状況の確認。
・他との交流学習①	6月	・読み聞かせボランティアの方からの本の紹介や本選びの学習。
・他との交流学習②	6月	・1年生への読み聞かせ活動と本選びのアドバイスの実施。
・インタビュー調査	12月	・本学級児童を対象に取組を振り返るインタビュー調査の実施。調査結果の検討。

2.2.1 アンケート調査

表4は、アンケート調査の項目である。調査項目の1の①は読書の児童質問紙調査(2018, 2019, 2021)の項目、1の②は著者自作の読書の興味・有用感に関する項目、1の③④は栃木県教育委員会(2022)の子どもの読書活動に関する実態調査の質問項目であった。また、調査項目の2は文部科学省(2019)が例示するキャリア発達を促すためにキャリア教育で育成する4つの基礎的・汎用的能力の内容を活用した質問項目であった。

2.2.2 読書カード記述

資料1は、著者自作の「読書カード」であり、「めあて、振り返り、読書の興味・有用感、児童と家庭のやりとり状況、担任および保護者の点検」の項目で構成した。原則、毎週金曜日に実施する朝読書で活用し、4月中旬から11月中旬の全20回を調査対象とした。

表4 「読書」と「キャリア教育」に関するアンケート調査の項目

1. 次の①から④について、自分の気持ちや考えに一番近いと思うものを1つ選び、該当する記号を○で囲んでください。
①学校の授業時間以外に、普段(月～金曜日)、一日あたりどれぐらいの時間、読書をしますか。(教科書や参考書、漫画や雑誌は除く) ア: 2時間以上 イ: 1時間以上2時間より少ない ウ: 30分以上1時間より少ない エ: 10分以上30分より少ない オ: 10分より少ない カ: 全くしない
②読書が、自分がやってみたくらい、自分ができるようになりたいこと、自分の好きなこと、興味があること、自分の目標などのために、役に立った、たすかった、よかったなどと感じたことはありますか。 ア: とってもある イ: 少しある ウ: あまりない エ: 全くない
③あなたは、本について家族で話すことがありますか。 ア: とってもある イ: ときどきある ウ: あまりない エ: 全くない
④あなたは、家族に本をすすめたり、家族から本をすすめられたりしたことがありますか。 ア: とってもある イ: ときどきある ウ: あまりない エ: 全くない
2. 今の自分の気持ちや行動に一番近いと思うものを1つ選び、該当する記号を○で囲んでください。
ア: いつもしている イ: 時々している ウ: あまりしていない エ: ほとんどしていない
①友達や家の人の話を聞くとき、その人の考えや気持ちを分かろうとしている。
②自分の考えや気持ちを、相手にわかりやすく伝えようと気を付けている。
③委員会、係、当番活動などで、自分から仕事を見つけたり、役割分担したりしながら、力を合わせて行動している。
④好きでないことや苦手なことでも、自分から進んで取り組んでいる。
⑤調べたいことや知りたいことがあるとき、自分から進んで資料や情報を集めたり、誰かに質問したりしている。
⑥何かをするとき、計画を立てて進めたり、途中でやり方にくふうしたり、見直したりしている。
⑦自分の夢や目標に向かって、生活や勉強の仕方を工夫している。
⑧学校で学んでいることと自分の将来(夢、目標、成長、今後)のつながりを考えている。

資料1 読書カードの項目

① 読書のめあてを書きましょう。

【朝読書後】

② 今日の朝読書で読んだ本は何ですか。読んだところの主な内容を書きましょう。

本の題名 主な内容

③ 今日の朝読書を振り返りましょう。

興味・関心のあること、目標、夢、将来、がんばっていることなどに、役に立つ本を読むことができましたか。自分の気持ちにもっとも近いと思う数字を○で囲みましょう。

4 とてもそう思う 3 少しそう思う 2 あまりそう思わない 1 全くそう思わない

④ ③の数字を選んだ理由を具体的に書きましょう。

⑤ 一週間のお家の人とのやりとりの様子を思い出して、当てはまるものにチェックを入れましょう。(✓)

1	お家の人から本を読んでいたことをほめられた。	4	お家の人と本をすすめ合うことがあった。
2	お家の人と本のことについて話をした。	5	お家の人と本をきっかけに興味・関心のあること、目標、夢、将来、がんばっていることなどについて会話が合った。
3	お家の人と本の感想を話し合うことがあった。	6	今週は、本に関するお家の人とやりとりする機会がなかった。
		お家の人のサイン	
		先生のサイン	

2.2.3 学級活動のワークシート記述

学級活動では、朝読書の充実を図る目的で実施するとともに、読書への意欲向上や読書の興味・有用感につながるように「なりたい自分」と読書活動を関連させる授業を実施した。「朝の読書」の時間に「読書カード」を活用した取組を推進するために表3に示す学級活動で児童の話合い活動を実施してきた。なお、各学級活動では、指導案(略案)と児童が記述するワークシートを用意した。

10月下旬には、それまでの取組を振り返り、個々の課題を明確にして、読書活動の充実に向けた個々の取組を設定し、その自分の取組を約1ヵ月実践するといった、学級全体で本実践を総括し今後の取組推進を図っていく学級活動を実施した。資料2は、学級活動の学習指導案(本時の展開)である。なお、それに向けては、1学期末の7月と2学期始めの9月上旬に、それまでの取組を振り返り今後の読書活動の充実に向けて個々の課題を具体化する学級活動を実施した。その集約結果は、表5のとおりである。「他者からアドバイスを得る、他者とやりとりに関する内容」や「自分で本を選ぶことに関する内容」等、大きく4点の共通する内容がみられた。

2.2.4 インタビュー調査

12月1日から12日に、対象者に対して本実践の振り返りを中心としたインタビュー調査を半構造化面接で実施した。その調査項目は、表6のとおりである。

資料2 学級活動の学習指導案（本時の展開）

1. 題材：「なりたい自分に向けて読書活動を充実させる取組を考えよう」

学級活動（3）ウ 主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用

2. 本時のねらい：読書活動の充実に向けて、相互にアドバイスをを行う活動を通して、自らの課題や可能性に気づき、めあてを具体的に立てて、主体的に実践できるようにする。

3. 本時の展開

過程	児童の活動	指導上の留意点	資料	◎目指す児童の姿 【観点】 〈評価方法〉
導入 つかむ 5分	1 課題を把握し、めあてをつかむ。 ・1学期の読書活動を振り返る。 ・グループごとに読書活動を充実させるための課題等を伝え合う。 ・本時のめあて「読書活動のさらなる充実に向けて、自分が実践することを決めよう」をつかむ。	・1学期の読書活動を振り返る場を設定し、一人一人が読書活動を通して成長していることに気付けるようにする。 ・グループごとに、課題等を伝え合う場を設定し、現時点での一人一人の課題等を把握できるようにする。 ・本時の活動内容とめあてを確認し、見直しをもって活動できるようにする。	・読書活動の様子の写真 ・これまでの読書カードを綴じたファイル、読書のアンケート結果 ・一人一人の課題等を記述したワークシート ・本時の活動内容を示す掲示物	
展開 さぐる 15分 見つける 15分	2 情報を収集し、可能性に気付く。 ・グループごとに本の紹介を相互に行い、読書活動を充実させるために役に立ったことを伝え合う。 ・中学生からの「読書に関するアドバイス」を聞き、読書活動を充実させるために役に立ったことを伝え合う。 3 解決方法を見付ける。 ・読書活動の充実に向けて、相互にアドバイスをを行う。	・本の紹介後、役に立った内容や取り組み方等について聴き合うよう促し、本の選び方等、課題解決するために必要な情報を得ることができるようになる。 ・話し合い活動が停滞しているグループには、課題解決の手がかりが見つけられるような事例やモデルを示す。 ・中学生からの「読書に関するアドバイス」を聞くことを通して、読書の有用感や読書時間をつくるための工夫等、課題解決するために必要な情報を得ることができるようになる。 ・友達や中学生からの情報を基に相互のアドバイスを通して、一人一人が具体的な解決方法を見付け、意思決定に向かっていけるようにする。	・ワークシート、一人一人が事前に準備した読書活動を充実させるために役に立った本 ・質問の例文カード ・中学生（昨年の6年生）からの「読書に関するアドバイス」動画 ・ワークシート	◎読書活動の充実に向けた課題等を明確にし、そのために必要なことについて考えながら話し合っている。 【思考・判断・表現】 〈観察・ワークシート〉
終末 決める 10分	4 個人目標の意思決定をする。 ・これからの読書活動で自分が実践することを決める。	・行動目標を記入する欄や1週間の取組状況をチェックする項目を設けたワークシートを用意し、具体的なめあて等を書くよう促し、強い意志をもって課題を解決するための実践ができるようにする。 ・本時の取組を賞賛したり、保護者からの願い等を紹介したりして、実践意欲が高まるようにする。	・ワークシート	◎話し合ったことを生かして、読書活動の充実に向けて自分が実践することを意志決定している。 【思考・判断・表現】 〈観察・ワークシート〉

表5 読書活動の充実に向けた児童の課題の内容
(ワークシート記述)

内容(人数)	記述例
他者からアドバイスを得る、他者とやりとりするに関する内容(8名)	一緒に読書について語り合える人を見つける。友達のおすすめをきく。友達と読書の話をする。など
読書時間の設定や計画に関する内容(8名)	家で読む習慣をつける。読書の時間をつくる。寝る前に読む。など
自分で本を選ぶことに関する内容(8名)	作者から探す。分厚い本を読む。インターネットで検索する。など
ゲームやタブレット等の時間を減らすことに関する内容(4名)	ゲーム時間を読書の時間に使う。ゲーム時間を減らす。タブレットを使う時間を減らす。など

表6 本実践後のインタビュー調査の質問内容

質問番号	内容
質問1 読書時間	6年生になってから最近までの月～金の読書時間を平均すると、学校の授業以外の時間で、どれくらい読書していますか。次の中から最も近い記号を1つ選んでください。 ア：2時間以上 イ：1時間以上2時間より少ない ウ：30分以上1時間より少ない エ：10分以上30分より少ない オ：10分より少ない カ：全くしない
質問2 読書時間	6年生になってから最近までの月～金の読書時間を平均すると、学校の授業以外の時間の読書の時間は、5年生のときと比べて変わりましたか。次の中から最も近い記号を1つ選んでください。 ア：とても増えた イ：少し増えた ウ：やや減った エ：とても減った
質問3 読書の興味・関心	読書の興味・関心は、5年生のときと比べてどのように変わりましたか。次の中から最も近い記号を1つ選んでください。 ア：とても高まった イ：やや高まった ウ：やや低くなった エ：とても低くなった
質問4 家族との読書に関するやりとり	読書についておうちの人とやりとりする機会は、5年生のときと比べて変わりましたか。次の中から最も近い記号を1つ選んでください。 ア：とても増えた イ：少し増えた ウ：やや減った エ：とても減った
質問5 家族との読書に関するやりとり	学級の平均をみると、5月27日と7月15日にお家の人とのやりとりが増えていました。それはなぜだと思いますか。また、学級の平均をみると、6月10日と10月14日にはお家の人とのやりとりが減っています。それはなぜだと思いますか。
質問6 取組を通じた成長	読書活動への取組を通して、3月に比べて自分自身がどのように成長した(力が身に付いた、できるようになった、得意になった等)と思いますか。
質問7 取組・方法	読書活動の充実に向けた読書カード、学級活動、その他の関連する取組や方法などについて効果的であった点についておしえてください。また、より効果的な取組や方法があればおしえてください。
質問8 読書カード	読書カードの各項目のよかったところや役にたったところを教えてください。また、直した方がよいところがあったらおしえてください。
質問9 学級活動の授業	これまでの読書活動への取組を振り返り、個々の課題を具体化し、その解決に向けた取組をクラスメイトと話し合い、個々が取組を決定した学級活動(10月27日)でよかったこと(自分にプラスになったこと)や、その取組の実践によって改善したことをおしえてください。

3 結果

3.1 アンケート調査とインタビュー調査結果

アンケート調査(読書時間を除く)の平均値と標準偏差の結果は、表7のとおりである。読書に関する各項目は4件法で程度の大きい順に4, 3, 2, 1とし平均値を算出した。キャリア教育に関する各項目の算出方法は、1つの能力について2つの項目で質問していることから、2つの項目の数値を合計し1つの能力ごとに平均値を算出した。アンケート調査の「読書時間」については、表1と同様に読書時間の長さの範囲を示す6つの項目から選択するものであり、その結果は、表8のとおりである。また、表6のインタビュー調査の質問1から質問4の結果は、表9のとおりである。

表7 アンケート項目の平均値と標準偏差

質問項目	実施月	平均値	標準偏差
読書の興味・有用感	3	2.53	0.83
	7	3.20	0.56
	11	3.07	0.88
本について 家族との会話	3	2.20	0.77
	7	2.33	0.82
	11	2.27	0.96
本について 家族間の推薦	3	2.47	0.99
	7	2.40	0.83
	11	2.33	1.11
人間関係形成・社会形成能力	3	6.20	1.21
	7	6.80	1.08
	11	6.67	1.54
自己理解・自己管理能力	3	6.47	0.74
	7	6.53	0.92
	11	6.00	1.31
課題対応能力	3	6.20	1.57
	7	6.00	1.13
	11	6.20	1.21
キャリアプランニング能力	3	5.47	1.25
	7	5.07	1.16
	11	5.40	1.24

表8 読書時間に関する本学級の結果

時期	2時間以上	1時間以上、2時間より少ない	30分以上、1時間より少ない	10分以上、30分より少ない	10分より少ない	全くしない
5年生 3月	0%	6.7%	33.3%	40.0%	6.7%	13.3%
6年生 7月	0%	26.7%	13.3%	46.7%	6.7%	6.7%
6年生 11月	0%	13.3%	13.3%	26.7%	13.3%	33.3%

表9 インタビュー調査結果（質問1～4）

質問1	2時間以上	1時間以上 2時間未満	30分以上 1時間未満	10分以上 30分未満	10分未満
6年生になってから最近までの月～金の読書時間を平均すると、学校の授業以外の時間で、どれくらい読書していますか。	0%	33.3%	20.0%	46.7%	0%
質問2	とても増えた	少し増えた	やや減った	とても減った	
6年生になってから最近までの月～金の読書時間を平均すると、学校の授業以外の時間の読書の時間は、5年生のときと比べて変わりましたか。	53.3%	33.3%	13.3%	0%	
質問3	とても高まった	少し高まった	やや低くなった	とても低くなった	
読書の興味・関心は、5年生のときと比べてどのように変わりましたか。	33.3%	60.0%	6.7%	0%	
質問4	とても増えた	少し増えた	やや減った	とても減った	
読書についておうちの人とやりとりする機会は、5年生のときと比べて変わりましたか。	13.3%	66.7%	20.0%	0%	

3.1.1 「読書時間」の調査結果

表1および表8より、近年の本校と全国・群馬県の結果をみると、最も多いのが「10分以上30分未満」で、本学級の3月と7月も同様であった。一方、本学級の11月は「全くしない」が最多であり、本学級では調査時期によって読書時間の変化がみられたが、表9の質問1と質問2より、6年生になってからの平均については全員が10分以上の読書時間があったと回答し、5年時に比べ増えたと感じている児童は86.6%であった。また、その回答を得た後に、読書時間増減の理由について追質問した。その結果、具体的な回答を得られたのは8名で、それらは増えた理由についてのみであり、「朝読書」や「読書活動」の取組の影響と回答したのが7名、「自分なりの興味や関心の高まり」の回答が1名であった。

3.1.2 「読書の有用感」の調査結果

表7より、時期（3月、7月、11月の3水準）を被験者内要因とした1要因分散分析をおこなった。その結果、「読書の興味・有用感」について有意な主効果がみられた（ $F_{2, 28}=5.091, p=.013$ ）。そこで、Bonferroni法による多重比較をおこなった結果、7月は3月と比較して有意に高い値であった。

朝読書後に児童が記述した読書カードの③（「今日の朝読書を振り返り、役に立つ本を読むことができたかに関する4件法の回答」）について、全20回を月ごとにまとめた平均値の結果は、図1のとおりである。朝読書で役に立つ本を読んでいる実感について時系列でみると、4月や5月に比べて、それ以降は向上していた。また、表9の質問3より、読書の興味・関心に

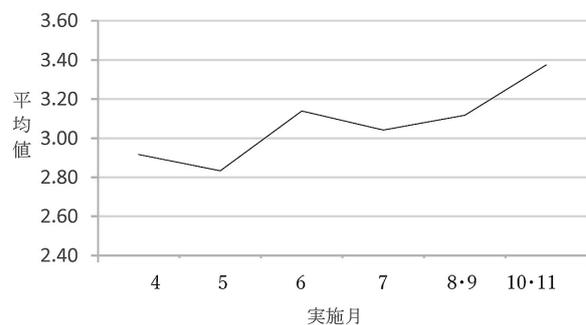


図1 読書カード回答「役に立つ本を読んだ実感」(月別)について93.3%が高まったと回答した。

3.1.3 「読書に関する家族とのやりとり」の調査結果

表7より、「本について家族との会話」と「本について家族間の推薦」について、時期（3月、7月、11月の3水準）を被験者内要因とした1要因分散分析をおこなった。その結果、有意な主効果はみられなかった。

表4のアンケート調査の「本について家族との会話」および「本について家族間の推薦」と同じ質問の栃木県教育委員会（2022）が毎年実施する「子どもの読書活動に関する実態調査」の結果は、表10のとおりである。「本について家族との会話」の栃木県と本学級5年生3月について肯定的回答（「とてもある」と「ときどきある」の合計）をみると、栃木県は65.7%、本学級は40%で、本学級は栃木県の結果に比べ25.7ポイント低かった。また、本学級の7月の肯定的回答は40%で、11月は46.7%であった。

「本について家族間の推薦」の栃木県と本学級5年生3月について肯定的回答をみると、栃木県は

表10 「本について家族との会話」と「本について家族間の推薦」の栃木県と本学級の結果

質問内容：あなたは、本について家族で話すことがありますか。					
時期	とてもある	ときどきある	あまりない	全くない	無回答
2022年1～2月 栃木県5年生 (対象720名)	24.2%	41.5%	13.1%	20.0%	1.3%
2022年3月 本学級5年生 (対象15名)	0%	40.0%	40.0%	20.0%	0%
2022年7月 本学級6年生 (対象15名)	6.7%	33.3%	46.7%	13.3%	0%
2022年11月 本学級6年生 (対象15名)	6.7%	40.0%	26.7%	26.7%	0%
質問内容：あなたは、家族に本をすすめたり、家族から本をすすめられたりしたことがありますか。					
時期	とてもある	ときどきある	あまりない	全くない	無回答
2022年1～2月 栃木県5年生 (対象720名)	15.4%	42.1%	16.0%	24.7%	1.8%
2022年3月 本学級5年生 (対象15名)	13.3%	40.0%	13.3%	33.3%	0%
2022年7月 本学級6年生 (対象15名)	6.7%	40.0%	40.0%	13.3%	0%
2022年11月 本学級6年生 (対象15名)	13.3%	40.0%	40.0%	20.0%	0%

57.5%、本学級は53.3%で、本学級は栃木県の結果に比べ4.2ポイント低かった。また、本学級の7月の肯定的回答は46.7%で、11月は53.3%であった。栃木県の結果に比べ本学級は、「本について家族との会話」および「本について家族間の推薦」について、本実践の調査を通じて肯定的回答は低かった。

読書カードの「一週間のお家の人とのやりとりの様子を思い出して、当てはまるものにチェックを入れましょう」における6つの選択肢の中で、5つは家族とのやりとりの内容に関する項目で、残り1つは家族とのやりとりが「無し」とする項目であった。そこで、やりとり「有り」の5つの項目を「有り」にまとめた回答割合の結果は、図2のとおりである。なお、読書カードの記述の中で、家族とのやりとり状況に関する記述は、読書カードへの記述に児童が慣れてきた5月中旬から開始した。また、家族とのやりとりを促す取組については、本研究の保護者への説明時に行い、その後は、読書カードの保護者からのサイン欄での点検

を通じた取組に限定し、その他の強化する働きかけは保護者に実施しなかった。

表9の質問4の回答を得た後に、家族とのやりとりの増減の理由について追質問した。その結果、「特になし」と「わからない」以外に得られた回答は11名で、その内容は、「保護者から働きかけがあったため増えた(4名)」、「自分から話すようになったため増えた(4名)」、「共通の流行や話題があったため増えた(2名)」、「家族と読書に関する会話をする状況が乏しかったため減った(1名)」であった。

定期的に活用する読書カードでは、全体としてやりとりの増加はみられないが、表9の質問4より、5年時より6年時が増えたと80%が回答し、その理由に本実践を契機としてやりとりが増えたとする回答は半数を超えていた。増えた理由をみると本実践をきっかけに保護者あるいは児童からやりとりする機会が生じたことを挙げていた。

本実践後に表6の質問5のインタビュー調査により、「家族とのやりとりについて学級平均が増えた時期と減った時期」を具体的に取り上げて、その理由について質問した。その結果、全員が回答し、「わからない・覚えていない」が5名で、それ以外の回答(複数回答)の中で、増えた理由については、「読書時間の増加や読書内容の影響があったため(4名)」、「図書館に行ったため(2名)」、「読書カードの影響があったため(1名)」、「親から声かけがあったため(1名)」であった。

また、減った理由については、「別のことに意識があったため」、「興味や関心が低かったため」、「忙しかったため」、「親に本に関する話す内容が乏しかったため」がそれぞれ1名であった。

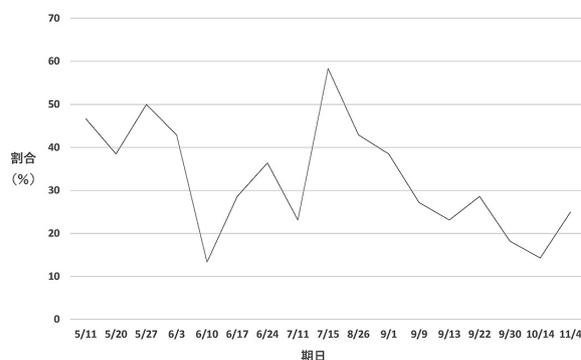


図2 読書カード回答「読書に関する家族とのやりとり有無の状況」

3.1.4 「キャリア教育で育む4つの能力」の調査結果

表7より、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の各得点について、時期（3月、7月、11月の3水準）を被験者内要因とした1要因分散分析をおこなった結果、有意な主効果はみられなかった。

表11は、表7の読書関係3項目の3月から7月への変化量とキャリア教育関係4項目の3月から7月への変化量の関係についてピアソンの単相関分析をおこなった結果である。「課題対応」は「本の家族との会話」および「本の家族間の推薦」と有意な正の相関がみられた（本の家族との会話、 $r = .298, p < .05$ ；本の家族間の推薦、 $r = .345, p < .05$ ）。同様に、読書関係項目の3月から11月への変化量とキャリア教育関係項目の3月から11月への変化量の関係について単変量分析をおこなった結果、「自己理解・自己管理」は「本の家族間の推薦」との間に有意な正の相関がみられた（ $r = .306, p < .05$ ）。

表11 キャリア教育で育む4能力の変化量と読書項目の変化量の関係

キャリア教育で育む4能力	読書の有用感	本の家族との会話	本の家族間の推薦	
3月と7月	人間関係形成・社会形成	0.108	0.194	0.139
	自己理解・自己管理	0.076	-0.007	0.261
	課題対応	-0.021	0.298*	0.345*
	キャリアプランニング	0.224	0.231	0.217
3月と11月	人間関係形成・社会形成	0.051	-0.013	0.119
	自己理解・自己管理	0.063	0.21	0.306*
	課題対応	-0.028	0.236	0.238
	キャリアプランニング	0.218	-0.019	0.007

* $p < .05$

表12は、表6の質問6（「読書活動への取組を通して身に付けた力」）の結果である。「読書に関する内容」、「勉強、教養、学力に関する内容」、「国語に関する内容」等の7つに集約できた。また、それらの力の中には、文部科学省（2019）が例示するキャリア発達を促すためにキャリア教育で育成する4つの基礎的・汎用的能力の内容に照らし、キャリア教育で育む4つの能力に重なる内容がうかがえた。

具体的には児童が身に付いたとする「コミュニケーションに関する内容」は「人間関係形成能力」、同様に「自己管理・時間管理に関する内容」は「自己理解・自己管理能力」、「勉強・教養、学力に関する内容」は「課題解決能力」、「自己理解・将来に関する内容」は「自己理解・自己管理能力とキャリアプランニング能力」である。

3.2 「学級活動」の調査結果

本学級の児童が1学期の取組を振り返り、個々の課題を具体化した後に、その解決に向けてクラスメイト相互で話し合いながら、今後の読書活動の充実に向けた取組や方法を意思決定する学級活動（資料2）を実施し、その授業で一人一人が決めた取組等を約1カ月間実践した。資料3は「授業の様子」である。

表6の質問9（「学級活動（資料2）」について、よかったこと、プラスになったこと等に関するインタビュー調査）の結果、「自分の理解や自分の成長があったこと（4名）」、「他者の理解や他者からの気づき・学びがあったこと（5名）」、「友達・他者とのやりとりがあったこと（6名）」、「特になし（2名）」であった。

表12 「読書活動への取組を通して、3月に比べて成長したこと、力が身に付いたこと等」の結果

カテゴリー(回答数)	回答内容
読書に関する内容(13)	読むスピードが速くなった、本に集中できるようになった、本の選び方が変わった、自分の好きな本がわかってきた、本を好きになれた、読書の興味が高くなった、本の相談に答えられた、朝読書を使えるようになった、本屋に行くようになった、家でも読むようになった
勉強、教養、学力に関する内容(7)	問題で何を問われているかわかるようになった、テストの点数が上がった、宿題にしっかり取り組むようになった、物語でいい言葉を見つけられた、方言等の言葉を身につけた、歴史の本を読むようになった
国語に関する内容(5)	漢字の書き方が身についた、漢字の読み方を学んだ、漢字が得意になった、文章問題がわかるようになった、国語の文章で想像できるようになった
自己管理・時間管理(5)	何時までに終わらそうと計画し決めてやるようになった、時間を意識して行動できるようになった、ゲームの時間を自分で調整できるようになった、睡眠が深くなった、ときばき行動することを心がけるようになった
コミュニケーションに関する内容(3)	会話が增えた、クラスメイトと前より話すようになった、アドバイスできるようになった
観察力・判断力・想像力等に関する内容(3)	周りをよくみるようになった、自分で判断して決められるようになった、想像する力がついた
自己理解、将来に関する内容(2)	自分の好きなものや好きなことがわかった、部活動について理解が深まった

資料3 学級活動の授業の様子



3.3 本実践の効果と改善点に関する調査結果

本実践後に表6の質問7（「読書活動の充実に向けた取組や方法等について効果的であった点等に関するインタビュー調査」）の結果、「クラスメイト間の話し合いやアドバイス（5名）」、「読書カードの活用（4名）」、「他学年への読み聞かせ活動（3名）」、「自分なりの工夫（2名）」、「わからない（3名）」であった。クラスメイト間の話し合いやアドバイスや他学年児童への読み聞かせ等、児童相互のやりとりの機会が効果的とする回答が上位にみられた。

本実践後に表6の質問8（「読書カードの各項目の効果や改善点等に関するインタビュー調査」）の結果、よかったところや役にたったところについては14名から回答があり、「興味・関心、役に立つ等の振り返りの記述（4名）」、「家族とのやりとり状況の確認（4名）」、「読んだところの本の内容の記述（3名）」、「めあての記述（2名）」、「読んだ本の題名の記述（1名）」であった。人数に違いはありながらも、読書カードのすべての項目が挙げられていた。

また、直した方がよいところについては3名が回答し、「めあてと役に立つところに記述する内容が重なるときがあった」、「読んだ本の内容について、読んだ箇所によっては書きづらいときがあった」、「めあてを記述するのが面倒であった」がそれぞれ1名であった。読んだ本の内容によっては、記述しにくい場合があったとする指摘がみられた。

4 考察と今後の課題

第三次基本計画では我が国の大きな課題として不読率を挙げ、子どもの読書に親しむ態度を育成し読書習慣の形成を図っていくことを強調しているが、本学級

でも読書時間の状況から同様の課題がみられた。

第三次基本計画の上述の課題を引き継ぐ現行の第四次基本計画は、推進法に基づき2018年度から2022年度にわたる子供の読書活動推進に関する基本方針と具体的方策を示し、「読書習慣を形成すること」、「友人同士で行う活動等を通じ、読書への関心を高めること」の2点を挙げている。また、家庭、学校、地域での重点項目を示し、その中で、学級を中心に実施や連携が可能な項目をみると、学校については「読書習慣の形成、読書の機会の確保」、家庭については「家庭での読書の習慣付けの重要性の理解促進」、地域については、「学校図書館やボランティア等との連携・協力」を挙げている。あわせて、第四次基本計画では取組を計画的に進めていくためのポイントとして、小学校や中学校の発達段階に応じながら、つながりのある読書活動の取組の必要性を指摘し、その中で小学校高学年では、本の選択ができ始め、好みの本の傾向が現れ、読書の幅が広がり始める傾向について示し、中学生では、共感したり感動したりできる本を選んで読むようになることや、自己の将来について考え始め読書を将来に役立てるようになる傾向について示している。

本研究では、以上のような第四次基本計画で示す方策・取組ポイントや小中学校の発達段階で留意すべき傾向を反映させ具体化したプログラムを作成し、その効果を検討した実践的研究であった。本研究を含め、現行の第四次基本計画に則った取組が、学校現場では多様に実践されているところであり、その基本計画で示す方向性やポイントを具体化した学校におけるプログラムとその実践効果を検討した実践的研究は、他に確認できていない現状にある。したがって、本研究は学校における実践の参考になり得る新規性のある研究と言える。

特に、その具体化を図る上で、朝読書とそれに関連する読書カードを活用する本研究の取組は、次のような点から実践的で実効性があり、学校の取組に資することが期待されると考えられる。まずは、朝読書が学校現場では馴染みのある教育活動である点である。次に、読書カードが第四次基本計画や読書量および読書習慣への影響に関する先行研究で効果的と指摘された項目で構成されている点である。さらに、朝読書や読書カードの活用の充実を図る目的で実施した学級活動では、第四次基本計画において効果的と指摘するクラ

スメイト同士や地域の方（読み聞かせボランティア）との対話的活動を計画的に取り入れた点である。

そして、本実践の成果として次の6点が挙げられる。

1点目は、読書時間の増加についてである。基本計画の目標では、小学生の不読率を2%以下にしているが、近年の読書の児童質問紙調査の結果をみると、読書を「全くしない」の割合が本校は9.5%から25.0%、群馬県は16.9%から22.7%、全国は18.7%から24.0%の範囲であった。本学級では、本実践後のインタビュー調査で取組の振り返りの視点で回答を求めたところ、読書を「全くしない」と「10分未満」はなく、また5年時に比べ増えたと感じている児童は86.6%であった。本実践は、読書時間の確保に一定の効果があったと考えられる。

2点目は、読書の有用感の向上についてである。アンケート調査により3月に比べ7月は読書の興味・有用感が有意に高まった。また、読書カードの振り返り結果を月別にみると、4月や5月に比べそれ以降は読書の有用感の平均値は高まっていた。さらに、本実践後のインタビュー調査により、読書の興味・関心が5年生に比べて高くなったとの回答が9割を超えていた。本実践は読書の興味や有用感の向上に効果があったことが示唆された。

3点目は、読書に関する家族間のやりとりへの効果についてである。本実践では家族とのやりとりを促す取組としては、本研究について保護者へ説明を行ったことと、児童の読書カードへの記述について保護者がサイン欄に点検印を記すること、児童は読書カードの1つの項目（1週間を振り返り、家族との本に関するやりとりの程度を6項目から選択しチェックする）に記入することの取組に限定し、その他の強化する働きかけは児童と保護者に実施しなかった。本実践後のインタビュー調査では、本に関する家族とのやりとりについて5年時より6年時が増えたと80%が回答し、その理由に本実践を契機としてやりとりが増えたとする回答は半数を超え、やりとりを促すことに一定の効果がみられた。

また、読書カードによってやりとりの増加が顕著であった2つの時期と減少が顕著であった2つの時期を取り上げて、その理由について質問した結果をみると、増加については、「読書カードの影響」、「図書館

に行った」、「親からの声がけ」、「読書時間が増えた時期」、「話したい読書内容があった」があった。それらは読書に関する家族とのやりとりを増やすヒントとなり得る可能性がある。特に、「読書カードの活用」、「図書館訪問」、「親からの働きかけ」は、学校や保護者の努力により実施が可能な内容と言える。一方、減少についての回答からは、読書に対する関心や意欲の高低の状況だけではなく、児童の学習や生活上の他の要因が優先する状況が読書活動に影響することがうかがえた。

4点目は、読書活動とキャリア教育の関係についてである。キャリア教育で育む4つの能力とされる「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の各得点と「本について家族との会話」および「本について家族間の推薦」について、本実践の前後の変化量の関係を見ると、「課題対応能力」と「本の家族との会話」および「本の家族間の推薦」、「自己理解・自己管理能力」と「本の家族間の推薦」との間に有意な正の相関があった。本に関する家族とのやりとりの変化とキャリア教育で目指す諸能力の育成が関係する可能性が示唆された。

また、児童が実感した本実践により身についたとする力の中には、キャリア教育で育む4つの能力に重なる内容がうかがえた。具体的には、児童が身についたとするコミュニケーションに関する内容は人間関係形成能力、同様に自己管理・時間管理に関する内容は自己理解・自己管理能力、勉強・教養、学力に関する内容は課題解決能力、自己理解・将来に関する内容は自己理解・自己管理能力とキャリアプランニング能力である。本実践は、キャリア教育で育む4つの能力の育成を促す効果が期待できる可能性が示唆された。

5点目は、読書活動の充実に関連する学級活動の実施による効果についてである。本実践後のインタビュー調査からは、読書活動の充実を図る学級活動を通して、読書活動以外の自分にとってのプラス面について、具体的にはクラスメイトとのやりとりに充実を覚え、自己の成長を実感し、自他理解を深めていたことがうかがえた。

6点目は、読書カードの有効性についてである。本実践後のインタビュー調査から本実践の効果的であった点については、カード活用を通じた他者とのやりと

りの機会を挙げていた。そのような機会を設定することが読書活動を充実させていく上で効果的であることがうかがえた。また、読書カードの各項目のよかったところや役にたったところについては、人数に違いはありながらも、読書カードのすべての項目があげられていた。それぞれの項目が機能していたことがうかがえた。

最後に、本研究のプログラムは以上のような成果を示すことができた一方で、課題も残されている。本研究は読書習慣の形成を促す取組であり、実践効果の検討については継続した追跡調査が必要である。また、学年単学級規模の学校の1クラスの児童を対象に、対照群を設定していないことから、他群との比較検討を行ってはいない。汎用性のある知見を示すには、より多くの学級や学年、そして他教員による実践から得られたデータの検討が必要である。また、本研究で得られたデータの分析についても、児童の属性別の分析や横断的な分析は十分ではなく、他の標準化尺度との併用による効果や妥当性の検討も行っていないため、さらなる検討が必要である。

基本計画や先行研究の指摘を踏まえ作成し活用した本研究の読書カードについては、その各項目のよかったところや役にたったところについての児童への調査から、人数に違いはありながらも、すべての項目があげられていたことから、それぞれの項目が機能していたことがうかがえた。しかし、どの項目がどのような理由でどのような時に有効であったか、あるいは、項目同士の関係や影響の分析等、詳細な検討は実施していないため、項目ごとの効果は明らかにできていない。一方で、そのように個別のニーズや効果について検討する余地を得ることができたことは、本研究に個別支援のプログラムを盛り込むことで、多様で実効性のある方法を学校現場に提供できる可能性を秘めているとみることもできる。以上のような取組と効果の検討については、今後の課題としたい。

引用文献

株式会社浜銀総合研究所 (2017) 「子供の読書活動の推進等に関する調査研究」報告書 平成28年度文部科学省委託調査
 〈https://www.mext.go.jp/content/20210610-mxt_chisui

02-00008064_2801.pdf〉

国立教育政策研究所 (2018) 「平成30年度全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査」

〈<https://www.nier.go.jp/18chousakekkahoukoku/report/data/18qn.pdf>〉

国立教育政策研究所 (2019) 「平成31年度(令和元年度)全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査」

〈<https://www.nier.go.jp/19chousakekkahoukoku/report/data/19qn.pdf>〉

国立教育政策研究所 (2021) 「令和3年度全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査」

〈<https://www.nier.go.jp/21chousakekkahoukoku/report/data/21qn.pdf>〉

国立青少年教育振興機構 (2021) 子どもの頃の読書活動の効果に関する調査研究～「読書離れ」の実態と、「読書好き」を育てるヒント～

〈<https://www.niye.go.jp/pdf/210811.pdf>〉

文部科学省 (2001) 「子どもの読書活動の推進に関する法律(平成13年法律第154号)」

〈https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/hourei/cont_001/001.htm〉

文部科学省 (2002) 「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」について(通知)

〈https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/hourei/cont_001/003.pdf〉

文部科学省 (2013) 「第三次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」

〈https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/05/_icsFiles/afieldfile/2013/05/17/1335078_01.pdf〉

文部科学省 (2018) 「小学校学習指導要領解説(平成29年告示) 総則編」東洋館出版社

文部科学省 (2018) 第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」の概要

〈https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/siryou/_icsFiles/afieldfile/2018/05/25/1404326_3.pdf〉

文部科学省 (2019) 「キャリア・パスポート」例示資料等について

〈https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/1419917.htm〉

栃木県教育委員会 (2022) 「令和3(2021)年度子どもの読書活動に関する実態調査結果」

〈https://www.pref.tochigi.lg.jp/m06/documents/r3kodomo_dokusyo_jittaichousa.pdf〉

鳥取県教育委員会 (2017) 「平成29年度 子どもの読書活動に関するアンケート調査結果」

〈<https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/1123470/gaiyou.pdf>〉